

## 「自立支援」何のため

標題は朝日新聞 2 月 3 日「耕論」。リードから一介護保険の見直しで「自立支援」を進める事業者への報酬が手厚くなる。社会保障の「自立支援」とは、だれのため、何のための支えなのか。そもそも、人間にとって自立とは何か。

3 人の論者のなかで、まず自立生活センターさっぽろ理事長の佐藤きみよさんの意見を紹介する。昨年、佐藤さんの『雨にうたれてみたくて』現代書館、2016 年 12 月を読んだ。なんとも心にせまる本であった。佐藤さんに新聞で「再会」できて嬉しくなった。



子どものころ、入退院を繰り返して治療とリハビリに明け暮れていました。曲がらない足を曲げ、曲がらない手を曲げるために。大人たちは「自立するため」「あなたの幸せのため」と私を励ましました。でも、痛くて泣いていた記憶しか残っていません。

脊髄性筋萎縮症で、12 歳から人工呼吸器を使っています。一番つらかったのは、少しずつ呼吸器を外す訓練です。「外せたら自立できる」と説得され、懸命に取り組みました。1 日 5 分、10 分……。消耗し、35 ㌔だった体重が 10 ㌔以上も落ちました。

振り返れば、障害はなくさなければならず、健常者に近づくことが自立であるという、健常者中心の価値観の押しつけだったと思います。

ありのままの私でいい。そう言ってくれる人は当時、だれもいませんでした。リハビリはうまくいかず、自分は社会に必要なないだめな存在だと思い詰めました。医師からは「外の世界を夢見てはいけない」と宣告されました。

絶望のなかで、「障害は個性で克服する必要はない」とする障害者自立生活運動の思想を知りました。私のなかで何かが急激に変わりました。「3 日間でいい」「死んでもいい」と覚悟し、アパートを借りて病院を出ました。27 歳のときです。

24 時間の介助がなければ、食事もおトイレも着替えもできません。当初は福祉制度も乏しく、チラシをまいて必死にボランティアを集めました。以来 28 年間、地域で暮らしています。リハビリで外せと言われた人工呼吸器は、パートナーのような存在です。

私はお料理が好きです。メニューを自分で考え、寝台型の車いすに乗って買い物に出かけ、食材を選びます。ヘルパーさんに「エンジンは 2、3 ㌔のいちょう切りに」などと細かく説明し、私の料理をつくります。ボイスクッキング、と呼んでいます。

私たち障害者がめざしてきた自立とは、無理をして何でも自分でやることではありません。介助者の方々に上手に助けを借りながら、自分で決め、決めたことに責任を持つことだと思います。

高齢者福祉の世界では、介護保険制度の見直しで「自立支援」重視が打ち出されています。耳に心地よい言葉ですが、本質的なところでは私が受けたリハビリと同じく、価

値観の押しつけに結びつく。そんな危うさを強く感じます。

何でも自力でこなし、要介護度が改善しないと迷惑をかける。高齢者がそう思わされてしまうことにならないか、心配です。介護が必要になっても、ありのままの自分で、自分らしく生きる。いろんな人の助けを借りて。そう考えたほうが、本当の自立に近づくと思うのです。

(2018年2月7日)